



生活の中の仏教語

『過去・現在・未来(三世)』

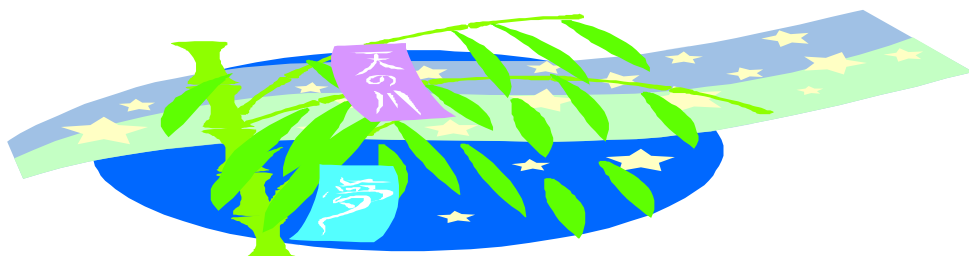
曹洞宗布教師 佐藤 孝洋 師

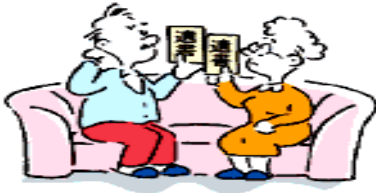
先日、何となしにテレビを見てた時、歌手の藤井フミヤさんが「川に架かる橋の上に立って、流れてくる水を眺め、また流れ去る水を眺めるのが楽しい。立って居るところがまさに現在であると感じる・・・。」と話をしていた。私は思わず中学校の古文の授業で習った鴨長明^{かものちやうめい}の作である「方丈記」の一節である「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず・・・」を思い出しました。

藤井さんが「流れてくる水」と表現したのが“未来”であり、「流れ去る水」と表現したのが“過去”、そして立って居るところが“現在”であると言いたかったのかもしれませんが。ところで、過去・現在・未来を改めて考えると、点と点で結びついておりますが、現在という時間はずっとあるものではありません。絶えず動いているのです。例えば、「アッ」と発声してみてください。この「あっ」と発した言葉が自分自身の耳で聞こえるまでにも時間が過ぎ、「アッ」と言った声を耳で聞いた時には、既に発声した時は過去の事になっているのです。現在や今というものが一瞬一瞬であることを思い知らされます。この世の中に存在する生命の営みや生滅をみても過去・現在・未来の中で時間が過ぎ、まさに「諸行は無常である」と感じざるをえません。

仏教では過去・現在・未来のことを三世（サンゼ）といい、三世にはそれぞれいろいろな仏さまがおられる。南無三世諸仏（ナムサンゼショブツ）とお唱えすることによって私たちを見守りお救いくださるのといわれます。曹洞宗には「修証義」（シュショウギ）という經典があり、その第5章「行持報恩^{ぎょうぢほうおん}」のなかに「過去、現在、未来の諸仏、共に仏と成る時は必ず釈迦牟尼仏と成るなり」とあります。私達の御先祖様方はお釈迦様となり私達をお守りくださいます。私達は過去の諸仏、現在の諸仏、そして未来の諸仏に感謝をし、現在の今を生きる一瞬一瞬を大切に生きることを心がけたいと思います。そのことが、「まごころに生きる」ことであり、ひいては明るい社会をきづくことになるものと思います。

曹洞宗 宮城県布教師協議会会員
(黒川郡大和町 龍泉院住職)





葬にまつわる体験談

「60歳の死後便利帳」

〔新潟県 男性 63歳〕

昭和一ケタという世代は、「あとは野となれ山となれ」という発想ができないらしい。死支度は、あまり嬉しいことでもないが、健康のうちなら、かなり客観的な処置も出来るのである。

そこで「良き終わり」をどのように設定するかを、60歳の時に考えてみた。

自分が死んだ後に妻が困らないこと。妻が死んだときに自分が困らないことが前提となる。私と妻の双方で遺書を作成した。どちらが先でも私の財産は妻に、妻の名義の財産は私に遺贈されるようにした。

2人とも死亡したあとの財産処理は、付加事項として遺言の第1条に詳記した。長男、長女がともにプラスになるように、土地、預金の配分を計画した。この場合、土地・建物の維持は考えず、売却して現金化することも含める。持ち家には利点もあるが、それ自体は金を産み出さない。遺贈された家族が、自由に処理できれば、アパートの家賃の足しくらいにはなる。

墓は、私たち夫婦のどちらかが死亡したときに建てる、場所と経費は用意してある。葬式は、私が総代の一人である寺で挙行する。葬儀屋さんもきめている。連絡すべき人は、夫婦それぞれにリストアップしてある。葬式費用（2人分）は、専門の預金通帳で銀行に預けてある。

葬式に関しては、「死後便利帳」という名のノートに、まとめてある。夫婦が世話になった人や、かかわりをメモ形式で書き、補足や削除をしている。親類は勿論である。急死した場合は、預金通帳や印鑑などの所在がわからないと困るので、土地の権利書などと共に金庫に収納して置く。

死んでゆく人は、残る人に迷惑をかけないことだけを考えればいい。死支度は、元気なうちから始めたほうがいい。「死期はわからない」。そのことがすべての基本だと考えるからである。

どうしてもしておきたいことの一つに、先祖のことを含めて、自分史を書き残すことが、手をつけないままに残っている。自分史が大袈裟なら、俳句などの趣味を句集に、あるいは句文集にまとめてもいい。

死んだあとで、その家がどうなったか、ある意味では、そのことが死者の価値を決めるのかも知れない。借金だけは残さない。それさえできれば「もって瞑³²すべし」とも言えるのである。

〔セキサー（葬にまつわる体験談）引用〕

歳時記

◆盆踊り

最近では宗教的な色合いは薄れてきましたが、元来盆踊りは、戻ってきた精霊を慰め、送り出すために催されてきました。また、戻ってきた霊が供養のおかげで成仏できた喜びを踊りで表す、と伝えられている地方もあります。 私たちが、祖先に感謝し生きていることの喜びを表現するために踊ると考えてもよいでしょう。

